
パンピーャンキー

つっくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パンピーヤンキー

【NNコード】

N9233Z

【作者名】

つづくん

【あらすじ】

妙にケンカが好きなこと以外一般ピートーな主人公と、一年生・入学時点でスケバンなスゲーヤツ。

その他、古武術を操らない親友など愉快な仲間達。

札付きのワルが集まる女子が三人くらいしかいない高校で、特に女の子を取り合うというわけでもなく、グダグダでタフでアイタタな戦いが今、始まるようで始まらない……！

そんな、マーケティングをまるつどゴミ箱に投げ捨てた個人的趣味にて書かれたお話。週一回程度投稿していきたいなと思つて

ます。誰か一人でもビビッと来てくれる方がいることを祈りつつ、
よろしくおねがいします。

グリー・ティングガール

「いつてきまーす」

今日という日のために買ったスニーカーに足を入れる。

履き心地は悪くない。玄関から外にでて、庭に植えてあるアカマツの葉を相手に上段蹴りを一発放つてみる。

蹴りが風を切る音と共に、目測違わず狙つた葉だけを一枚落とす。「フフン……俺の右足も気に入つたようだ」

「邪魔

「あだつ」

新しい制服でも全く変わらない技のキレに少しばかり悦にひたつていると、遅れて出てきた妹に、横腹を蹴つ飛ばされた。彼女の技に美しさはないが、滅法痛い。ダメージが内側に残るのだ。

「わざわざ蹴ることないだろ……」

「そうね。次からは殴ることにするわ」

「ああ、そつちで頼む」

足の裏を使われると服に汚れが残つてしまつ。今日は妹も新品のローファーなので許そう。

……と、殊勝な判断を下せるのは妹の蹴りと同時にスカートの中に潜む白い布が見えてしまつたからである。もちろん意味もなくパンツが見えたことを白状するわけにもいかない。こんな罪悪感はさつさと忘れてしまうに限る。

「それにしても春休み短いわー」

妹があぐび混じりに今日から学生の義務が始まることを嘆ぐ。毎日退屈そうにテレビばかり見ていたくせにそんな言葉が出てくるとは驚いた。

「そうか？ 俺は長く感じた」

俺も妹も電車通学になるので、進む方向は同じだ。自然、肩を並べることになる。

「進級と進学じゃ重みが違うかもねー。しかも兄ちゃん、こっちが引くくらい楽しみにしてたし。あんな学校のどこがいいんだか」

「あんな学校とはなんだあんな学校とは。荒れてて、汚くて、馬鹿しかない。完璧だろ？」

せいじん

県立正人高等学校

いりのぼり

それが俺、五里登の今年度から通うことになる学校の名前である。県下のヤンキー中坊を一手に引き受ける、今日本で最も熱い男子校だ。……今年から何を思つたか共学制になつてゐるが、受験会場で女子の姿を見ることはなかつたので、甘酸っぱい青春を送ることは少なくとも学内では不可能だらう。

「でも正直さー、いまどきケンカとか流行らないでしょ」

「甘い甘い。そんな生半可な気持ちで正人高校にいたら一発でパシリに認定されるね。適正価格で喧嘩が取引されてるよ、あのガツコは」

「……それって、大安売りの間違いじゃん？」

「まあ、先輩に聞いた話だからどこまで本当かは中に入つてみてわからんがね」

「誇張が多分に入り混じつてることを願うつよ。妹として「相変わらずあぐいをしながらそんなことを言つ。実のところ、俺の安否など毛ほども興味ないのだろう。

話題がなくなり、一人で黙々と歩いて駅にたどり着く。妹は学校自体変わらないし、俺も中学時代から電車通学だったの駅までの道のりは変わらず、特に新鮮味はない。

近所の人間しか使うことのない無人の駅に着くと、妹の友達が先に来ていたので、妹がそちらに駆け寄る。家にいるときと同一人物とは思えない姦しいテンションで会話に花を咲かせ始めた。相変わらず女という存在は怖いと思う。

定期券を切らせたまま購入していないので、切符売り場に向かう。この四月から電車通学を始める生徒も多いのか、普段はルール上設置しているだけに見える古びた切符自販機に、今日は少しばかり並びができていた。

「おはよー」「やあまあ」

「んんっ……おはよー」「さいマス」

並びの最後尾につくと目の前にいた女が振り向いて挨拶を仕掛けてきた。驚いて思わず変な声をだしてしまった気がする。女は俺の呆けた返事を不審に思ったのか一瞬きょとんとなると、自販機の順番が自分に回っていることに気づいて慌てて鞄から財布を取り出した。

まあ、見慣れない顔だったのでも、初めての電車通学に緊張しているだけだろう。というか、制服自体初めて見るデザインだ。このあたりで電車で通学するような学校はブレザーしかないはずだが、セーラー服である。几帳面に足首あたりまでスカートで隠しているあたり、真面目な女の子なのだろう。

「おはよー」

「ん、よーっす」

挨拶少女がどの切符を買えばいいのかわからないのか、なかなか俺まで順番を回してこない間に、今度は聞き覚えのある声が挨拶をしてくる。

「お、似合わないねえ」

俺の姿を見てケラケラと笑うのは、成宮誠一。
なるみやせいいち

体は小さいが、目鼻立ちはわりと整っているので放つておけば女にモテそうな奴だが、俺とツルむようになつてからは少なくともそんな話を聞いたことがない。多分原因は事あるごとに暴れたがる俺である不憫なやつだ……が、こいつはこいつでよく俺の喧嘩に首を突つ込んでくるので人のことは言えないだろう。とにかくお互いに喧嘩相手を見つけあう悪友というわけだ。

お互いに素行が悪いため、この度、正人高校に仲良く入学することになった。

「バーカ、お前も似たようなもんだろ、と言いたいがお前は似合ってんな」

中学までは学ランだったが、高校に入つて俺たちはブレザーを着

ている。鏡を見ても制服が浮いているのを自分でも感じたが、誠一の方は早くも着こなしているように見える。少し抜いた髪の色と、主張しすぎない小指の指輪がまた小癡だ。高校生然としているとうか、あかぬけているというか、とりあえず正人高校に入れば真っ先に小指のそれを狙われるのだろう。

「俺もなんかアクセ持つてくれば良かったかねえ」

券売機の順番が回ってきたので、手のひらで転がしておいた百円硬貨を三枚入れる。装飾品の類に興味はないが、持つているとその手の物が好きな人間に「おいちょっとあんちゃん」と声をかけてもらうきつかけになるのは確かだ。別に大人しくしているだけでもケンカは買えるだろうから気にしなかつたが、最初から臨戦体制な誠一に、少しばかり先を越されたような思いになる。

「なんなら予備のブレスレットもあるけど、使う？　コイツほど値打ちはないけどさ」

指輪を回しながら、全く魅力的に思えない提案を持ちかけてくる。「いやいいよ。借りたもん賭けて負けたら笑い話にもならねえ」

「はは、その時は僕ともう一戦追加でいいじゃん？」

「それはそれで、笑い話になつてねえだろーが」

ちなみに、俺と誠一が戦った場合、七割方俺が負ける。家が怪しげな武術の道場である誠一に、何から何まで我流の俺では基本的に太刀打ちできないのだ。それでもウェイトとタッパの差で押し切れることがあるが、そういう時は誠一の方が慣れない戦い方を試している時だつたりするのである。

「ん……」

と、話しながら切符とお釣りを取り出そうとすると、お釣りが三十円多いことに気づく。さつきの挨拶少女の物だろう。

「どうしたの？」

「あー、いや、さつきの口、釣り取り忘れてるわ。三十円」

「知り合い？」

「いや、知らない口。俺の女関係ナめんな」

普段なら無視して手をつけずに放つておくが、変に挨拶をされた手前、なんとも複雑な気分に駆られる。というか、既に手に取つてしまつている以上、戻すのもおかしな話だし、ネコババするか返すかのどちらかしかないだろう。

「じゃ、昼飯代にしちゃえればいいじゃん」

「んー、お前ならどうするよ?」

「返す。出会いは大切にしなきやねー。これから毎朝会うなら特にさつ」

晴れやかな顔でそう言つ切る。最初の自然にネコババを推す態度はなんだつたのか。

「でもノボルつてば女の子苦手じやん?」

「ま、そなんだけどさ。よくわからんが電車通学慣れてないみたいだつたし、いきなりつり銭ネコババされるつてのも氣の毒だろうよ」

俺の言葉に、誠一は妙ににやにやし始める。

「ばつ……ちげえよ? 別にちよつと可愛かつたしなーとか思つてねえよ?」

「ふーーーん……いやいよい、不良の癖に女恐怖症とかサマにならないしねえ」

「不良でもねーって」

人よりちょっとばかり血の气が多いだけだ。たぶん

とにかく誠一に笑われたままというのも腹が立つので、改札を抜け、先ほどの挨拶少女を探す。

あたりを見回すと、ずいぶん離れたところで見つかった。時間的には電車が止まることはまずないはずの場所だったが、周りに人がいてもやりづらいのでここは彼女が電車通学に不慣れなことを感謝しよう。

姿を見る少し怖気づいてしまう。

「ほり、じつじつのは勢いが大事だよ」

「つるせえ」

茶化す誠一に、結局背中を押される形で歩き出すたかがお釣りを届けるだけだ本来なら緊張するようなことでもなんでもないが、いや、関係ない人間にしてはちょっと親切が過ぎる氣もするから、やっぱり俺はちょっとおかしなことをしようとしているのではないか？

「あのひ、三十円あつたら中学ん時は米大盛りにできたよな？」

「あのおー！」

俺が逃げ腰な態度を見せるや否や、誠一が大声で挨拶少女に声をかけた。

「はい、後は任せるね！」

さわやかな笑顔で誠一が俺の方に顔を向ける。こいつ楽しんでやがる……！

「はい？」

挨拶少女はそんな俺達の愉快なやり取りなど知る由もなく、見知らぬ男一人に突然話しかけられて、怪訝そうな顔を……見せてない。ふむ、少し抜けた女の子なのだろうか。と、失礼なことを考えている場合ではない。

「あの、お釣り取り忘れてましたよ」

うむ、言えた。思つたより直截に言えた自分を内心でほめつつ、銅の硬貨を三枚差し出す。

あとはこれを向こうがちょっと慌てたように受け取つてくれれば任務完了だ。

「あ、それ、最初からありました、けど？」

挨拶少女は小首を傾げてそんなことを言う。
別に彼女はつり銭を取り忘れていたわけではなく、俺が普段行つよつに忘れられたつり銭を無視しただけらしい。

エマージェンシー、エマージェンシー。こんなときのトラブルシユーティングは俺の脳内には入つてない。誠一は笑いをこらえているのか腹筋をぷるぷるさせていて頼りにできない。というか、つり銭無視とかそんな判断ができる女の子なんて思つてなかつたよ！
「ごめんね！ ははっ、恥ずかしいわもー！」

「あ、そ、そうですか……」

間。

圧倒的で、絶望的な、絶対零度の間が場を包む。

「えーっと、そちらはお友達なんですね？」

どうしようもない状況下で、挨拶少女が誠一の方に目を向ける。

「あ、ああうん。一応そただけど……それが？」

「それじゃ……」

俺の手のひらから一十円だけ受け取つて、十円玉を誠一の方に差し出す。目に涙まで浮かべていた誠一は、心得たよつに十円玉を受け取つた。

何が起つているのかよくわからない。

「ほら、ノボル、感謝しないと。共犯になつてくれるんだつてさ。いまさらそのお金、財布に入れにくいでしょ？」

「あ……ああ、そういうことが、悪いな。早とちりしちまつて……」

「いえ、わざわざありがとうございます」

そう言つて挨拶少女はぺこりと頭を下げる。……どこか馬鹿にしていたが、この中では俺が一番子供だとこうお話だつたらしい。「あ、この時間で電車を待つならこっちよりあつちの方がいいよ！」誠一が笑顔で、挨拶少女にここには電車が止まらないことを示す。「あ、そうなんですか。すみません、私ちょっと天然入つてて」天然入つてる奴はこんなよくできた対応しねえー！

「あと腹黒いってよく言われるでしょ」

そして誠一君、笑顔で容赦ないね君いー！

「はい、養殖天然なんによくいじめられます」

普通に自分わかつてたつ……といふか初対面相手にそれカミング

アウトしちゃうのか！ 重いよー

「大丈夫？ 顔色悪いよ？」

誠一がいろいろと理解しているであろう上でそんなことを言つてくる。目が笑つてんだよ！

「ああ、誰でもいいから殴り合いをしたい気分だ」

「ほんとう、女の子前にいるのにやめてよねー。あ、こいつすぐ人のこと殴るから、さつさと人がいるところに行つた方がいいよ。あの子達の周りとかオススメ」

そういうて、誠一は俺の妹がいるあたりを指差す。まあ、確かに一番安全ではあるだろ？が、そもそも手を出すつもりもないわけで……。

「はい。それじゃ失礼しますね」

会話に乗つてはくれたものの、変なやつらと思われたのだらう。挨拶少女はさつさと改札のあたりまで歩いていった。

「うーん、脈ナシかなー？」

「今のやりとりのどこにナンパ的要素があつたんだよ……」「いや、ノボルは結構脈アリだと思つよ？ 友達紹介してもらつたら教えてよね！」

「聞いてないしありえないし……つづーか疲れた」

「あと、妹ちゃんがすごい軽蔑した目でこっち見てる」

「それはどうでもいいや」

俺達も電車が止まる位置まで戻ることにする。なんとなく挨拶少女と同じ車両に乗るのは嫌で、最後尾の電車が止まるとこりを選んだ。

程なく電車が到着し、座席に全体重を預けて一息つく。

とりあえず一眠りしたい。両手を枕にしてまぶたを閉じる。扉がしまり、笛の音と共に電車が揺れだした。

「それにしても、結構可愛い子だつたよね」

「あー、そうか？ よく覚えてない」

と、言いつつ、実はちゃんと覚えていたりする。確かに可愛かった。なんだかんだ言って警戒されていたのか表情に変化が乏しかつたので、笑つたところを見てみたいものである。

……まあ、性格に一癖ありそうでもあつたが。

「さすが。女と見たらとりあえず声をかけるなんてやるねえ」

「はあ？ いつ俺がそんなことしたよ？」

むしろけしかけたのは誠一の方だろうに、ここは何を言つてゐるんだ？

「自覚ないなんて罪だなあ」

「いやマジで何言つてんの」

「とりあえず目を開けていらっしゃんよ」

「なんだよ……あー……」

目を開けると腕をくんで眉間に拳を当てている妹とその友達が目の前にいた。あらぬ誤解を与えるのが目的だったか。確かに不用意だつたかもね。俺が悪いのかもしない。1割くらい。

「じゃ、僕はちょっと疲れちゃつたから寝るね。お休み

「覚えてろよてめえ……」

「朝っぱらからお盛んですねーー」

妹が笑顔で指をポキポキと鳴らす。指が太くなるからやめなさい……じゃなくて。

「おいおい、妹よ。お前は誤解して……」

「歯、食いしばりな

「つづー……」

弁解する前に妹の拳がボディに突き刺さる。殴りやすい位置であろう顔面にこなるのは、入学式を目前に控えた兄に対する優しさのつもりか。朝食が戻りそうになるが歯をくいしばつてこらえる。あれ、『歯を食いしばる』ってこういう意味だったっけ……？

結局妹は俺に一言の弁解も許さず、自分も何一つしゃべらないままに車両から出る。あいつ、これだけのためにこっちに来たのかよ。

「あの……すみません、妹さんには私から言つておきますから」

悶絶する俺に、妹の友達の一人、みゆきちゃんがやさしく声をかけてくれる。ちなみにどうでもいい情報を一つつけておくならば、誠一の妹である。誠一の実のない言葉に惑わされない数少ない人間の一人だ。

「うん、まあ、妹よりコイツに言つてほしいかな」

あからさまに狸寝入りを決め込んでいる誠一を指さす。

「あはは……えと、正人高校行くつて聞いたので、これ、作ってきました。良かつたら食べてください」

「え、なになに、いつからそんな積極的につづる……」

聞き捨てならなかつたのか、誠一がいきなり身を乗り出してきた。直後、車両内に心地よい破裂音が響き渡ると、誠一が左の頬を押されてうずくまる。みゆきちやんが誠一に平手打ちをした、と理解するまで少しの時間を見た。

「恥ずかしいなあもう……あ、迷惑だつたらいいんです……ナビ……」

「ああ、うん、ありがとう！ 嬉しい！ ただ、ちょっと立ってるかな……なんてな！」

立て続けに男一人が女の子に殴られているわけで、これ以上同じ車両にいたら人を呼ばれそうだ。しかもどうせ俺達が彼女達の尻を触つたとかそういう話になつてしまつに決まつている。

「あ、そ、そうですね！ それじゃまた！ 感想聞かせてくださいね！」

慌てて弁当を受け取ると、みゆきちやんは妹を追いかけて走り去つていつた。

「お互い……苦労するね……」

「誠一は自業自得だろう、けど……なんでかな、同感だわ……」

依然、ボディに与えられたダメージは残つてゐる。みゆきちやんのおかげで誠一に対する怒りは行き場がなくなり、俺の中で哀しみにその姿を変える。

一人でため息をつきながら、今度こそ俺達はひと時の眠りにつくのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9233z/>

パンピーヤンキー

2011年12月28日22時53分発行